

明治時代の英和辞書・公文書で「統計」が登場した時期

MENU

- 1 明治時代の辞書で「統計」が登場したのは？
 - 2 明治時代の公文書で「統計」が登場したのは？
- 【こぼれ話】英華和訳字典の表紙（英文）の「TOKEI」について

1 明治時代の英和辞書で「統計」が登場したのは？

（本稿は総務省統計局HP「統計 Today No.136」を基に作成）

1 辞書における「Statistics」

「英和对訳袖珍辞書」^{しゅうちん}（袖珍：そでやポケットに入るほどの小型であること）をはじめ、幕末から明治初期に出版された英和辞書について、「Statistics」の掲載状況をみると、調べた限りでは、明治6年（1873年）の「英和字彙」で「統計表」、明治14年の「哲学字彙」で「統計学」、明治19年の「和英語林集成」で「Tōkei（統計）」の訳字が、それぞれ最初に登場しています。

【追記】統計 Today No.136 公開後、引き続き探索したところ、昭和19年版の「明治事物起原」の「スタチスチック」の「(一)スタチスチックの訳語」において「本邦人が、統計の二字を使ひ始めしは、いつ頃よりのことか、開成所編の英和辞書には見えず、明治六年日就社版の【英和辞彙】に、始めて Statistics 國誌、統計表、國誌学の譯あり」とする記事があり、統計 Today No.136 で、筆者が調べた限り、英和辞書ではじめて「統計」を含む訳字が登場するのは「英和辞彙」であるとしたことを裏付ける手がかりとなる史料が存在することも分かりました。

なお、「英和对訳袖珍辞書」（いわゆる「開成所辞書」）は、英蘭辞書の系譜、「英和字彙」（いわゆる「柴田辞書」）は英々辞書の系譜となっています。英和辞書における統計の訳字は「統計」や「統計学」となじみのある西周（幕命により津田真道とともにオランダに留学し「統計学」を学び、我が国に移入）、箕作麟祥（「統計学」の訳字を考案）、柳河春三（「統計」の訳字を考案）のいる開成所の系譜ではなく、長崎の英語伝習所出身の柴田昌吉らによる「英和字彙」で初めて「Statistics」を「統計表」と訳していることは意外でした。

・ 附音挿図英和字彙



【画像】 国立国会図書館デジタルコレクション

また、「和英語林集成」の第2版が出版された明治5年は、大蔵省に統計司が設置された翌年に当たりますが、当時はまだ「統計」という訳字が辞書に掲載されるほど社会に浸透していなかったと考えられます。

2 「英華字典」、「英華和訳字典」における「Statistics」

英華字典（英語—中国語の対訳辞書。ロプシャイト著）は、慶応2年～明治2年（1866-1869年）にかけて香港で出版（PART I～IV）されたもので、「のちの英和辞書の編集に大きな影響を与えた」（三省堂大辞林）とされています。明治16年（1883年）に日本で出版された英華字典の訂増版では、英語「Statistics」を中国語「国紀、国志」と訳し、「a general statistical account」を中国語「統紀」と訳し、一方、英語「Sum」を中国語「合計」、「統計」などと訳しています。中国語訳の「統計」の用語が出てきますが、これは「Statistics」ではなく、あくまで「Sum」に対するものです。

次に、英華和訳字典（英語—中国語—日本語の対訳辞書。津田仙ほか訳、中村敬字校正）は、明治12～14年（1879-1881年）にかけて出版（3分冊）されたものです。

この字典では、英語「Statistics」を中国語で「国記」、「国志」と訳し、そして日本語で「コクシ」（国の人員、工業、耕作、製造、通商等を書きつらねたる書）と訳しています。また、「a general statistical account」を中国語で「統記」と訳し、そして日本語で「トウケイヘウ」と訳しています。一方、英語「Sum」は中国語「合計」、「統計」などとし、その上で日本語「ソウケイ」、「ソウスウ」と訳しています。

なお、「明六雑誌」第15号（明治7年8月刊行）に津田真道「政論四」があり、そのなかで統計院の創設について言及しています。同論文中「各国統計院の事務は 我大蔵省内検査寮の職掌に大暑相同しと云ふ」とあり、検査寮は、今でいうなら会計検査院に相当する組織であり、同論文でいう「統計院」の「統計」は「会計」の意味に使用されていたようです。ちなみに津田は、表紀提綱において「表紀の原語をスタチスチキと言う」としています。

【別表】

		掲載状況
(1862) 文久 2年	「英和对訳袖珍辞書」初版 ¹	「Statistics」の掲載なし
(1866) 慶応 2年	「英和对訳袖珍辞書」改正増補版 ²	
(1867) 慶応 3年	「和英語林集成」 ³ (英和の部) 初版	
(1867) 慶応 3年	「英和对訳袖珍辞書」改正増補版 ⁴	
(1869) 明治 2年		
(1871) 明治 4年	大蔵省に統計司設置 (同年、統計寮に改称)	
(1872) 明治 5年	「和英語林集成」 ³ (英和の部) 第2版	「Statistics」: 「Jōjitsu wo shiraberu koto」 ⇒「実際のありさま (情実) を調べること」という意味
(1873) 明治 6年	「附音挿図英和字彙」 ⁵ 初版	「Statistics」: 「国誌、統計表、国誌学」
(1874) 明治 7年	モロー・ド・ジョンネ著、箕作麟祥訳「統計学」(文部省) 出版 ⁶ 論を刊行	
(1874) 明治 7年	シモン・ヒッセリング述、津田真道訳「表紀提綱 一名政表学論」出版	
(1881) 明治14年	「哲学字彙」 ⁶ 初版	「Statistics」: 「統計学」
(1881) 明治14年	太政官に統計院設置	
(1882) 明治15年	「英和字彙」 ⁵ 第2版	「Statistics」: 「国誌、統計表、統計学、国誌学」
(1886) 明治 19年	統計院は廃止、内閣に統計局設置	
(1886) 明治 19年	「和英語林集成」 ³ 第3版	(英和の部) 「Statistics」: 「Tōkei」 「Table of statistics」: 「tōkeihyō」
		(和英の部) 「Tōkei トウケイ」: 「Statistics」 「統計学」: 「science of statistics」 「統計表」: 「statistical table」

3 「統計」の訳字の源流は？

「Statistics」、「a general statistical account」の訳字をみると、1-2のとおり、英華辞典は「国紀」、「統紀」、英華和訳辞典は「国記」、「統記」となっています。これらにおいて「紀」と「記」がどのように使い分けられているのか理由ははっきりしませんが、どちらも「account」の意味で使われていると見られるので、同義とみてよいでしょう。「(「紀」は「道筋や順序を追って整理・記録する。」「記」は「書きしるすこと。また、その文書。記録。」(デジタル大辞泉))

ちなみに、津田真道が明治7年(1874年)に和訳し、太政官政表課が出版した「表紀提綱」は「表紀」、杉亨二が明治9年に設立した「表記学社」(のちにスタチスチック社)は「表記」となっています。

なお、「表紀提綱」の「表紀」について、横山雅男は、昭和15年(1940年)の柳澤統計研究所報第45号の「Statistikの譯字に就て」において、津田真道は「どういう書から「表紀」を引用したのかは判然としない」としつつも「スタチスチックを表紀と訳したのは、中国の張衡歴議の「考之表紀 差謬数百」から引用したのではないかと推定しています。さらに、「表紀」だけではわかりにくいことから「一名 政表学論」と別名をつけたのではないかと推定しています。

4 「統記(統紀)」が「統計表」と和訳された理由

英華和訳辞典において、英語「a general statistical account」を中国語で「統記」と訳し、これを「トウケイヘウ」(統計表)と和訳していますが、その理由ははっきりしません。

¹「英和对訳袖珍辞書」初版：日本最初の英和辞典。幕府洋書調所(のちの開成所)の堀達之助を筆頭に西周、千村五郎、竹原勇四郎、箕作麟祥などが編纂に参加。資料：立教大学図書館 堀達之助デジタルライブラリー
²「英和对訳袖珍辞書」改正増補版：開成所刊(堀越龜之助編、柳河春三・田中芳男らが協力)。資料：早稲田大学図書館 古典籍総合データベース
³「和英語林集成」：日本最初の和英辞典。米国人宣教医 J.C.Hepburn により編纂。通称ヘボン辞書。和英の部と英和の部で構成。資料：明治学院大学図書館 和英語林集成デジタルアーカイブス、国立国会図書館デジタルコレクション
⁴「英和对訳袖珍辞書」改正増補版：慶応3年(1867年)出版分は、前年出版分を木版刷りにしたもの。明治2年(1869年)出版分は、内容は、慶応3年(1867年)出版分と同じ(版元の変更のみ)。資料：早稲田大学図書館 古典籍総合データベース、国立国会図書館デジタルコレクション
⁵「英和字彙」：明治初期、国産最大の活版英和辞書。資料：玉川大学教育博物館HP、国立国会図書館デジタルコレクション
⁶「哲学字彙」：日本最初の哲学辞典。資料：大辞林、国立国語研究所HP、国立国会図書館デジタルコレクション

これに関連して、岡松^{かい}徑は、大正4年(1915年)の「統計集誌第414号」の「統計譯字の略考」において「徑^{おもえ}以為らく最初スタチスチックを統計と譯せしは英華字典を折衷せしものかと推察するのであります 今英華字典を見ますと Statistics を國紀、國志とし、science of statistics を國學、國知とし、statistical account を統紀としてありますから我邦**統計の譯字は此の統紀の紀を計と換へたのではありませんまいか**」^{〇〇〇}としてい

ます。
英華和訳辞書の元となる英華字典において、中国語の「統計」は、「Sum」の訳字とされていますが、「Statistics」の訳字とされており、^{やく}「統記(統紀)」と「統計」の2つの中国語は、同義語ではないと考えられることから、筆者も、岡松の推測を支持したいと思います。つまり、訳字としての「統計」は、日本独自の意味として、和訳の段階で中国語の「統記(統紀)」の意味に相当するものとなったということなのでしょう。

5 最初に「統計」と訳したのは誰だったのか？

「Statistics」を「統計」と最初に訳したのは、開成所教授であった柳河春三とされています。これは、明治2年(1869年)に石橋元内閣統計局長が開成所の学生であったときの記憶に基づくものです。その記憶では、氏名までは詳らかにされていませんが、後に、一橋大学細谷新治教授が柳河春三と推定しています⁷。

なお、筆者は、柳河春三の著書・訳書で、「統計」の訳字に関する記述があるものの検索⁸をトライしてみましたが、その証拠となる書物は、発見できませんでした。

2 明治時代の公文書で「統計」が登場したのは？

(本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.1」を基に作成)

1 「統計」の用語が最初に登場する公文書は？

官庁の文書に「統計」が最初に用いられたのは、明治3年(1870年)8月4日に外務省が諸省に廻達した文書(外国貿易品輸出入の物品高表を編集、貿易年表を出版する旨を通知

した文書)とみられ、その中で「統計年鑑」という用語がでてきています。

【資料1】外務省ヨリ諸省へ廻達文書 明治三年七月八日

(太陰曆。太陽曆：明治三年八月四日)

各開港場輸出入物品高去巴年中之分上木ニ付三部宛御達申候乍御面倒御順遠留ヨリ御返却有之度候也
外国貿易品輸出入ノ多寡ヲ調査シタルモノハ此書ヲ以テ始トス爾後外国貿易ノ事務大蔵省ニ属スルヲ以テ租稅寮ニ於テ前年ノ成模ニ倣ヒ各港輸出入物品高ヲ編輯(へんしゅう)シ其時々之ヲ頒布セリ後關稅局ニ於テ外国貿易年表ヲ刊行シ更ニ精密ヲ加フ又**統計年鑑**モ詳(つまびらか)ニ之ヲ登載ス故ニ本文ニ属スル物品表及大蔵省頒布ノ取調表等ハ総テ之ヲ畧ス

2 官庁の組織名に「統計」が最初に用いられたのは？

官庁の組織名に「統計」が最初に用いられたのは、伊藤博文の建議(米国視察から帰国(明治4年(1871年)5月)後作成)に基づき、明治4年7月設置された大蔵省の統計司(同年8月、統計寮に改称)とされています。島村史郎「日本統計発達史」によれば、「伊藤博文がアメリカの財政・金融制度を調査し、同年5月に帰国して建議したことによると言われている。」とされています。同書に、その内容が掲載されていますので、ここに紹介します。

【資料2】明治4年5月の建議(統計寮に係る部分)

第九ヲ**統計寮**ト為ス。凡ソ全国ノ財計ヲ蒐集シ、甲年ノ收支ヲ量リ、乙年ノ出納ヲ定メ以テ政府ニ稟報シ、人民ニ公告スルヲ要ス。是レ特ニ此ノ寮ヲ設置シ、之ヲシテ物産、戸口、貨幣、正租、雜稅、公債、官祿等ヲ**統計セム**ト欲スル所以ナリ。

4 「統計学」の訳字が初めて世に出たのは？

「統計学」の訳字が初めて世に出たのは、明治7年(1874年)6月に文部省出版の「統計学」(モロー・ド・ジョンネ著「Elementde Staisique」、箕作麟祥訳)とされています。

【資料3】モロー・ド・ジョンネ著、箕作麟祥訳「統計学」(文部省)第1巻 明治7年6月

【原文】

凡例
此學原名ヲスタチスチックト云ヒ其ノ説ク所ハ皆算數ヲ以テ国内百般ノ事ヲ表明シ治国安民ノ為モ緊要ノ者タリ故ニ上古以来苟モ開化ノ稱アル國ニ於テハ未タ一定ノ名稱ヲ下サスト雖モ間ク此ノ業ヲ修ムル者多ク降テ紀元千七百年代ニ及ヒテ初メテ命スルニ此名ヲ以テシ碩學鴻儒相與ニ討論スト雖モ人

⁷ 「スタチスチック解題」16頁

⁸ 早稲田大学図書館 古典籍総合データベース、国立国会図書館デジタルコレクションから「柳河春三」、「柳川春三」を含む図書を検索し、「統計」の訳字に関する記述の有無を目視で確認。

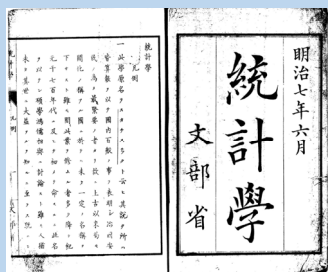
猶未ダ其世ニ大益アルヲ知ルニ至ラス既ニシテ仏蘭西大變革ノ後其國人等大ニ此學ヲ講明シ其業ヲ擴充セシヨリ遂ニ普ク世ニ布及シテ人々皆其國ヲ利シ民ニ裨アルヲ知ルニ至リ方今⁹ニ及テ歐州各國此業ヲ講習セサル者鮮シ然ルニ我國未タ此學科ノ書ノ世ニ翻譯ヲ經シ者アラサルカ故ニ今⁸者ハジメテ¹⁰此書ヲ譯シ以テ官梓ニ付スト雖モ其科名一補填スル譯字ノ如キモ從來或ハ政表國勢等ノ字ヲ用キテ亦未タ一定普通ノ稱アルヲ見ス因テ此ニ改メ譯シテ統計學トス

【原文をひらがな表記にし、句読点、ルビを加えたもの】¹¹

凡例

此学原名をスタチスチックといい、その説く所は皆算数を以て国内百般の事を表明し、治国安民の爲め最も緊要の者たり。故に上古以来いやくも開花の称ある国に於ては未だ一定の名称を下さずと雖も間々此業を修むる者多く、降て紀元 1700 年代に及びて初めて命ずるに此名を以てし^{せきがくこうじゅ}碩学鴻儒¹²相与に對論すと雖も人猶未だ其世に大益あるを知るに至らず。既にして^{いまだなお}仏蘭西大變革の後其國人等大に此学を講明し、其業を擴充せしより、ついに普く世に布及して人々皆其國を利し、民に裨あるを知るに至り、方今に及ては歐州各國、此業を講習せざる鮮し。然るに我國未だ、此学科の書の世に翻譯を経し者あらざるが故に今者、初めて¹³此書を訳し、以て官梓に付すと雖も其科名に填する訳字の如きも從來、あるいは政表、國勢等の字を用いて亦未だ一定普通の称あるを見ず。因て此に改め訳して統計學とす。

「統計学」巻之 1



【画像】：国立国会図書館デジタルコレクション

5 柳河春三、福地源一郎、箕作麟祥の関係は？

柳河春三は、「統計学」（明治 7 年（1874 年））を翻訳した箕作麟祥とともに、開成所で翻訳等に従事していました。また、柳河は、「統計寮」の創設（明治 4 年）を発案に関わった福地源一郎（伊藤博文の米国視察（明治 3 年 11 月～明治 4 年 5 月）に随行）は、お互いの著書・訳書の序文を記すなどの関係でした。このことから、柳河から二人に何らかの形で「統計」という訳字について伝わったのではないかと考え

⁹ 原文は 今

¹⁰ 原文は 海メテ

¹¹ 【参考文献】：高木秀玄「箕作麟祥と統計学」（関西大学経済論集）

¹² 学問をきわめた大学者のたとえ

¹³ 高木の前出の文献では、「海メテ」を「荊めて」としているが、筆者は、これを文脈から「初めて」と表記した。

¹⁴ 【参考資料】：総務省統計局HP「統計学習の指導のために（先生向け）－「統計」という言葉の起源

られています¹⁴。また、箕作麟祥は、元治元年（1864 年）外国奉行支配翻訳御用頭取として、福沢諭吉、福地源一郎とともに英文外交文書の翻訳に従事していたこともあります。

これまで「統計」の用語が、初めて登場したのは明治 4 年（1871 年）の「統計寮」の創設を含む建議と言われていましたが、その前年の明治 3 年 8 月 4 日に外務省が諸省に廻達した文書において「統計年鑑」の用語が登場していたことから、外務省において「統計」の訳字を考案された可能性もでてきました。ちなみに、箕作麟祥は、明治 2 年から翻訳御用掛（外国官：のちの外務省）に在籍していましたが、これは偶然でしょうか。いずれにしても、柳河春三、福地源一郎、箕作麟祥の 3 人のトライアングルが、「統計」の訳字に深く関わっていたようです。

6 統計の訳字が定着するまでの紆余曲折

統計の訳字が定着するまでには、明治の半ば頃まで、異論もあり、また、論争もありました。これについては、[統計図書館コラム【人物編】No.0006「森鷗外」](#)で紹介しています。

【こぼれ話】英華和訳字典の表紙（英文）の「TOKEI」について

（本稿は総務省統計局HP「統計 Today No.136」を基に作成）

英華和訳字典の表紙（英文）は、「TOKEI」と表示されています（英華字典の表紙（英文）は「TOKIO」（東京））。辞書の表紙という有難いところに「TOKEI（統計）」が登場しているのでは・・・と、期待して調べてみましたが、真相は、明治初期は「東京」を「トウケイ」と読むこともあったということでした。（東京都公文書館HP「明治東京異聞～トウケイかトウキョウか～東京の読み方」）

・英華和訳字典、坤（明治 12 年（1881 年））表紙



【画像】国立国会図書館デジタルコレクション